

政治変動を解明する週刊読書人
中国政治と大衆路線
 大衆運動と毛沢東、中央および地方の政治動態

鄧小平体制下の中国は、いわゆる現代化路線の進捗によって、毛沢東政治を過ぎ去りしドラマの一齣に納めてしまおうとしている。しかし、文化大革命においてその極限的な展開を見せた毛沢東政治は、そうしたダイナミックスは、そうした歴史の二ページに閉じこめられるものではない。非毛沢東化が進みつつある今日

こそ、毛沢東政治に関する内的な分析と歴史的な位置づけが迫られるのであり、それは現代中国研究者のみならず、広く同時代の知識人に与えられた課題だともいえる。

本書は、このような要請に応えようとする労作であり、現代中国の政治変動を

現代中国の政治変動を解明

政治指導のパターンに焦点を当て

中嶋 嶺雄



毛沢東

それは著者が大衆路線の形成過程をまず一九二〇年代の党創立から三〇年代前半の中華ソビエト共和国の時期に求め、建国後の一九五〇年代、以降の現代化時代における一党独裁制のディレンマとして考察しようとしているからだといえよう。このような問題意識を基底に据えたいうで、

中国共産党史研究のなかでも、これまで「禁区」であった一九三〇年末の富田事変は、本書の第二章「地方指導者としての毛沢東」で詳しく

とくに社会主義への過渡期から「大躍進期」にかけての毛沢東政治に大衆路線の全面展開を探り、そして毛沢東政治に

現代中国の政治発展の過程を綿密にあとづけている本書は、一方で、党中央と地方との拮抗関係のなかに政治的動向の起源を見ようとしている点特徴的だ。

江西省出身者集団との間の地方主義的対立がくわわっている」（本書六二ページ）と見る評価は、右のような中央と地方という視座のなかで得らる点で著者に要望したい課題であるが、後者は、大衆路線という政治基盤からもっとも遠い地点で生じた事件でもあり、ここにも毛沢東政治ないしは現代中国政治の負の遺産が残されているといえよう。

いづれにせよ、「党の大衆路線の原型はすでに中華ソビエト共和国時代に出現していた」（二二〇ページ）という前提で、下からの「大衆動員論」とも上からの「大衆動員論」とも異なる毛沢東型大衆運動論の解明を試みた著者の目的は本書において十分に達成されている。

ただ、著者の多大な努力にもかかわらず、資料分析や引用の仕方があまりにも丹念でありすぎるためか、個々の事象の細密画としてはすくなくとも、全体像がくつきり浮き彫りされているとは必ずしもいえないようにも思われた。（A五三七五頁・三六〇〇頁・慶応通信）（なかじま・みねお氏）東京外国語大学教授・国際関係論・現代中国学専攻）

★こじま・ともゆき氏は京都産業大学助教授・現代中国論専攻。訳書にタウンゼント「現代中国」など。一九四三（昭和18）年生。

週刊読書人 86.2.10